View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Konan University Repository

KONAN UNIVERSITY

ベルリン：都市文化論の試み：いくつかの『回想録』への注釈

著者	蔭山 宏
雑誌名	甲南法学
巻	57
号	3・4
ページ	1-54
発行年	2017-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00002263

《論　説》

ベルリン―都市文化論の試み

―いくつかの『回想録』への注釈―

蔭　山　　宏

問題の所在

本論文はベルリンを題材に都市文化論の歴史的変遷に注目する。ベルリンはヨーロッパの主要都市のなかでは歴史が浅く、伝統も乏しいと言われているが、それでも１９８７年に東西ベルリンで「ベルリン７５０年記念」の催しが大々的に行われているので、７８０年になる、それなりの歴史をもっているわけである。「７５０年」という根拠はベルリンの姉妹都市のケルン（ライン河畔の大都市ケルン Köln とは別のシュプレー河畔の Cölln のこと）の名前が最初に公式文書にあらわれたのが１２３７年であることに求められており、あくまでひとつの目安にすぎない。

（1）ベルリンにもささやかながら市壁に囲まれた中世都市の時代はあったが、本論文はベルリンが現代的大

都市に変貌する時期、19世紀末から１９２０年代に至る時期に焦点を当てることにしたい。ベルリンは１７０９年にプロイセンの首都となり、フリードリヒ大王の治世を経て都市基盤が確立されていったが、ヨーロッパの大都市の仲間入りをしたのは19世紀に入ってからのことであり、オーストリアやフランスとの戦争に勝利し、統一されたドイツ帝国の首都になった頃には、遅ればせながら軍事的にも経済的にもヨーロッパの大国の首都としての地位を確立した。ロンドンやパリ、あるいはウィーンなどの伝統豊かな都市文化に比肩しうるとは言えないまでも、ベルリンがようやく固有の都市文化を広く享受するようになったのは、ビスマルクによる統一以後のことであり、現代的大都市としてのベルリンに関心を示す文献が多数公刊されるようになったのは、20世紀への世紀転換期のことであった。

例えばパリのような都会の拡がりは欠けていたものの、メインストリートであるウンター・デン・リンデン通りやその中央で交差するフリードリヒ通り近辺は、当時の都心部であり、王宮や政府施設などがあるだけでなく、各種の文化施設、娯楽施設なども整備され、乗合いバスや地下鉄など市内交通が整備されたこともあって、ベルリン市民はもちろんのこと、地方や外国の観光客も押し寄せ、大都会の文化、雰囲気が感じられるようになった。ウンター・デン・リンデンを中心とする旧都心部（旧市街）では場所が手狭になり、繁華街は西へ拡がり、ポツダム広場を超えて「西地区への行進」が進み、ビスマルクがパリのシャンゼリゼ通りを模してつくったクーアフュルステンダム通りにまで及んだ。

ベルリン大学の私講師だったゲオルク・ジンメルの有名な都市論「大都市と精神生活」は１９０３年に発表されているが[1]、それにやや遅れてベルリン論史上に残る二つの著作、建築家アウグスト・エンデルの『大都市の美』[2]と建築や美術の批評家カール・シェフラーの『ベルリン　ある都市の運命』[3]も出版された。と同時にこの時期のベ

ルリン都市文化論として逸せないのがハンス・オストヴァルトの『大都市資料集成』[4]であろう。

本論文がおおよそ対象とする１８９０年代から１９３０年に至るベルリン史において重要な年はワイマール共和国二年目の１９２０年である。この年にベルリンは周辺の都市や行政区を合併して「大ベルリン」を形成した。これによってベルリンの面積は約13倍に膨れ上がり、人口も倍増した。正式に言えば、先ほど触れた西地区の繁華街クーアフュルステンダムも１９２０年以前にはベルリン市内ではなく、ベルリン郊外に位置していたことになる。

（2）筆者はこれまでベルリン都市文化史に関連する論文をいくつか発表してきた。[5]「世紀転換期ベルリンの都市風景」、「「植民都市」ベルリンの転変」、そして「ナチズムとベルリン」と題されたこれらの論文は本論文とともに、筆者のベルリン都市文化論研究の一環をなすものである。このうち「「植民都市」ベルリンの転変」は世紀転換期に至るベルリン史を植民都市・亡命者都市という観点から跡づけており、「世紀転換期ベルリンの都市風景」はベルリンの都市風景において重要な意味をもつ「ミーツカゼルネ（賃貸兵舎住宅）」と呼ばれる、主として労働者用の集合住宅とそこに住む人びとの生活に着目し、ベルリンの都市素描画家として名高いハインリヒ・ツィレの作品との関連を論じている。一方「ナチズムとベルリン」はルネ・ケーニヒの『回想録』におけるベルリン論にヒントをえて、「亡命者都市ベルリン」という観点からベルリンにおける「社会の崩壊」の一面にスポットを当てたものである。

また直接ベルリンを主題としたものではないが、ベルリンを念頭においた関連する論文として「ジンメルと１９２０年代」、「ドイツ印象主義の社会的側面」、及び「遊歩者とベンヤミン」があり、これらはベルリン論という

よりも筆者なりの現代的都市文化論を展開したものであり、ベルリン都市文化論の理論的背景にあたるものである。いずれも芸術上のモダニズム運動の基盤として現代的大都市を位置づけ、大都市的精神状況における芸術運動と政治思想の関連に注目した論文である。「ジンメルと１９２０年代」においては、ジンメルの都市論を中心に、彼の流行論や表現主義論を通して、ジンメルのモダニズム論を明らかにしており、「ドイツ印象主義の社会的側面」では印象主義の社会的基盤を現代的大都市の成立に求めている。「ベンヤミンと遊歩者」においては、現代的大都市の成立期にあたる19世紀前半のパリに叢生したと言われる「遊歩者」の精神史的意味を、ベンヤミンの「遊歩者」論に即して検討し、あわせてベルリンの遊歩者についても若干言及した。これらの私の論文のなかには20年以上前に書かれたものもあり、おのずと本論文の関心とずれるところもあるが、それでもある程度共通する問題関心において書かれたものである。

（３）パリを「19世紀の首都」と呼んだのはベンヤミンだったが、「20世紀の首都」をニューヨークとすれば、ベルリンはささやかではあるものの「１９２０年代の首都」であったと言えよう。ドイツにおける「近代から現代への移行期」に当たるのが世紀転換期から１９２０年代に至る時期であり、現代化の第一次段階が世紀転換期に始まり、その第二段階にあたるのが１９２０年代であった。ドイツ語には「世界都市（Weltstadt）」という表現があり、世紀転換期以降ベルリンは「世界都市」を自認するようになった。ベルリンが長らく「世界都市」として意識していたのは隣国フランスの首都パリであったが、世紀転換期以降「世界都市」イメージに転換が見られ、パリに代わってニューヨークやシカゴといったアメリカの都市が「世界都市」のライバルとして意識されるようになった。[6] ベルリンは今やパリを凌ぎ、ニューヨークとも肩を並べるに至ったとされただけでなく、１９２

0年代にもなると、文化的活性化という点ではパリやニューヨークをも凌ぎ、「ベルリンを制する者は世界を制する」（ツックマイアー）[7]と言われるまでになった。

本論文はこの時期のベルリンの「都市生活」と「都市文化」の特徴をあきらかにすることを主題としているが、できるだけ具体的な実態をイメージしやすいように、何人かの人物の『回想録』に見られるベルリン論を題材として用いている。まず論文全体の導入としてシュテファン・ツヴァイク（Stefan Zweig）の回想録に即して世紀転換期のベルリンについてスポットを当て、いくつかの論点をとりだすことにしたい。

ツヴァイクの「回想録」においては世紀転換期におけるウィーン、ベルリン、パリ、ロンドンのいわば比較都市論が展開されているが、ロンドンについての考察は短いのでここでは割愛している。ツヴァイクの比較都市論は中上流教養市民層の自由な物書きの見方に制約されているが、都市文化の拡がりと都市文化の担い手に注目しており、本論文の基準となる観点を示している。そのあとに取り上げる三つの「回想録」はいずれもワイマール共和国時代のベルリンを同時代として体験した青年たちの見聞に基づいている。フェリックス・ギルバートはユダヤ系の上流教養市民層出身の大学人であったのに対し、ヘンリー・パクターも大学出の教養市民層ではあったが、共産党や社会民主党にも所属していた政治的関心の旺盛な青年として、ギルバートとは別の世界を生きていた。これに対し最後に取り上げるエルンスト・エーリヒ・ノートは貧困層の出身であり、ベルリンの集合住宅で貧しい青少年時代をおくった。なおツヴァイクとギルバートはユダヤ系ゆえに、パクターとノートは左翼活動ゆえに亡命している。

1、世紀転換期のベルリン――『昨日の世界』（ツヴァイク）から

（1）「昨日の世界」

世紀転換期のヨーロッパの主要都市の特徴については、シュテファン・ツヴァイクの自伝的書物である『昨日の世界』[8]における都市観察を検討するのが有益であろう。本書は彼の「ビルドゥングスロマン」（「教養小説」）と言っていい内容の前半から、次第に転調し、最後にはヨーロッパの市民世界に対する文字通りの遺言の書となった。ツヴァイク個人の、あるいはオーストリア上流市民階級の視野に制約されてはいるが、ヨーロッパ都市世界への格好の入門書でもあり、既に著名な書物ではあるが、ここで取り上げるに値する。

「昨日の世界」と呼ばれている第一次大戦以前のオーストリア・ハンガリー帝国は「安定の黄金時代」であった。すべてが安定的な「持続」の上に築かれていた。誰もが自分はどれだけ所有し、どれだけ自分に入ってくるのか知っており、何が許され何が禁じられているかをわきまえていた。万事がその規範をもち、自己の一定の精神の「度量衡」をもっていた。ツヴァイクの言う「精神の度量衡」は１９２０年代には失われてしまうので、特に注意しておきたい。こうした安定に由来する利益を享受したのは当初はただ「持てる人びと」だけであったが、次第に広範な大衆に広まりつつあった。ひとは聖書よりも「進歩」を信じるようになり、その結果生まれたのがモダンライフであった。

ウィーンの路上には、夜、ほの暗い明かりに代わって電燈が輝いていた。ガス燈の時代は過ぎ去り、いまや電気の時代になっていた。商店はショーウィンドウをはじめ人の心をそそる美観を呈するようになり、リング大通りのようなメインストリートだけでなく、郊外にいたるまでがその恩恵を受けるようになっていた。モダンライ

フが広く行き渡っていたのである。電話も登場していたし、馬を必要としない車、路面電車も街頭の日常風景になっていた。水も苦労して運ぶ必要はなくなり、火もガス栓をひねればつくようになり、システムに支配されることで快適な生活が用意されていた。

ツヴァイク家はチェコのメーレン地方出身のユダヤ系の商人だったが、ウィーンに移住すると直ちに上層の文化圏に適応し、息子シュテファンも恵まれた青少年時代をおくることになった。大学生であることがまだ多大な特権を意味する時代、彼は大学で自由気ままな生活を愉しんだ。兄が父親の会社に入ったこともあって、シュテファンは家業を継ぐ必要もなかったから、彼の大学入学も「家門の名誉に博士の称号」が加えられさえすればよいだけの話で、ツヴァイク家にとってどんな種類の博士号かはどうでもよく、それはシュテファン本人にとっても同じだった。すでに文学に心底惚れていた彼にとって、大学で専門的に講義される学問は何一つ関心をひかず、大学は彼の「芸術における努力」のために獲得された完全に自由な2、3年間という以上の意味をもたなかった。一日24時間がすべて彼のものだった。はやくして才能を認められた彼は、19歳にして自分の詩集を有力な出版社から刊行し、有名な作曲家マックス・レーガーが彼の詩に曲をつけたいと申し出てきた。そして彼は学生にしてウィーンの有力紙「ノイエ・フライエ・プレッセ」の文芸欄執筆者の地位を獲得した。

ツヴァイクほどの成功は珍しい例であるにせよ、彼と同様に恵まれた環境にあり、稼ぐ必要がなく自由な生活をおくったひとは少なからずいた。なかにはボヘミアン的生活に興じる者もいた。ベンヤミンの友人でプルーストの共訳者でもあったフランツ・ヘッセル（Franz Hessel）もそのような人物の一人だった。彼はツヴァイクの一歳年上でほぼ同年代にあたるだけでなく、ユダヤ系の裕福な子弟だった点も同じである。経済的努力によって社会的に上昇した父親のおかげでさしたる苦労もせず恵まれた青少年時代を過ごしたことや、大学で地道な研究

に打ち込む意欲がなかった点でも同じだった。ヘッセルはミュンヘンのシュヴァービングでボヘミアン的生活をおくっていたこともあった。[9]

（2）典雅なウィーンと活力のベルリン

再びツヴァイクに戻ろう。若くして世に認められたツヴァイクではあったが、伝統の重荷を負ったウィーンは何かと不都合だった。やがて彼はベルリンに逃避していく。「あらゆる安定した市民的雰囲気を逃れ、そのかわりに、解放されて、まったく自分だけを頼りに生活をする」というのが、ツヴァイクにとってベルリンに逃避する企ての意味であった。当時ウィーンはすでに「ローカル」であると感じられ、ベルリンの方には「世界都市」の香りがした。ウィーン同様ベルリンにおいても、彼は一学期にたった二度大学に足を踏み入れただけであった。「私がベルリンにおいて求めたもの」は「友人でも講義でも教授」でもなく、「より高度でいっそう完璧な種類の自由」だった、とツヴァイクは率直に語っている。

だが同じドイツ語を話すとはいえ、ウィーンとはまったく違う文化風土がベルリンにはあった。彼は急速に、大学という閉鎖的空間にではなく、より開かれた世紀転換期のベルリンという都会にひきつけられていく。それにしても華麗で典雅なウィーン、「食事も女性」も「魅力的」なウィーンから、味気ない「アメリカ的」都市と言われたベルリンに移って、ツヴァイクは一体どこに惹かれたというのであろうか。すでに「黄昏」はじめていたウィーンと違って、ベルリンは「きわめて興味深い、歴史的な時期」にあたっており、殺風景で小さく、豊かであるとはいえないプロイセン王国の首都からドイツ帝国の首都に格上げとなり、急速に「世界都市」への上昇を開始した、その過渡期の活況を呈していた。ベルリンはかつてライバルだったミュンヘンやドレースデンはもち

ろん、ハプスブルク王朝の帝都ウィーンをさえ尻目に、才能ある人や野心家を惹きつけ、大企業、富裕層、芸術家、作家の多くはベルリンに向かいつつあった。そこでは、

「〈新しい〉文学がわがウィーンよりもいっそう活発に、いっそう衝撃的に振舞っているということ、そこではデーメルやそのほかの若い詩人たちに会えるということ、そこでは絶えず雑誌やカバレット（キャバレー＝文学寄席）や劇場がつくられるということ、要するに、そこではウィーン言葉で言う〈何ごとかが起こっていた〉ということを知るだけで、私には十分であった」[10]。

なぜこうした違いが生じるのであろうか。ウィーンは数百年の伝統と集中した権力によって依然としてベルリンを凌駕していたが、それだけにまた伝統的なものに縛られ、おのれの過去にとらわれて動きがとれなくなっており、モダニズムと総称される若い人びとの大胆な実験に、「慎重かつ傍観者的」な態度をとっていた。他方ベルリンにおいては、伝統の貧弱なことがかえって有利に作用した。かつてその威光によってドイツを含めた中部ヨーロッパの中心都市に位置していたのは間違いなくウィーンだったが、いまやドイツ国内はいうまでもなく、中部ヨーロッパの野心と才能のある若い連中はベルリンに向かい始めていた。

とはいえツヴァイクは正直に告白している。歴史豊かで典雅なウィーンからベルリンにやってきた当初は幾分幻滅した。そこでは食事や飲物の粗末さは言うに及ばず、女性の服装や身のこなしなど、おしなべて「優雅さ」が欠けていた。都心部に拡がる緑地帯ティアガルテンはやや「成金」風であったし、都心のフリードリヒ通りやライプチヒ通りにしてもまだ空き地があった。軽快で魅力的な「浪費」の可能性にあふれているというよりも、

スタール夫人が百年ほど前に述べたのと同様に、「清潔さ」と「秩序正しさ」の都市と言っていいのがベルリンだった。[11]

しかしそのようにベルリンの表層ばかりで見ていたのでは、従来の型にはまったベルリン像と変わるところはない。ベルリンは急激に変わりつつあった。むしろ絶えず変化し続けるところにベルリンの独自性があるのだという議論（シェフラー）もあった。上昇するベルリン、可能性の未来の都市ベルリンの魅力は圧倒的だった。その気になれば、新しい活気に満ちたサークルを探すのは容易だった。そのうちの一つ「来りつつある者たち（die Kommenden）」という名前のグループをツヴァイクは紹介している。[12] このグループの集会はベルリン西地区のノレンドルフ広場に面したカフェで開催され、そこには「詩人や建築家、スノッブとジャーナリスト、織物工芸家や女流彫刻家を装う若い娘たち」、出身地から言えば、ロシアの学生やスカンジナヴィアの女性、ドイツ国内ではヴェストファーレン人、バイエルン人、シュレージェンのユダヤ人など、「きわめて異質な者」同士がひしめきあっていた。いつも同じ仲間と顔を突き合わせていたウィーンには到底見られない光景だった。伝統にとらわれない自由な雰囲気がそこにはあった、とツヴァイクは報告している。熱気あふれる議論、荒々しい勝手気儘な議論が繰り返され、詩や戯曲の朗読もおこなわれた。ウィーンにも異質な者はいたはずではあったが、互いに接触する機会が乏しかっただけでなく、対決する機会はいっそう少なかった。

パリに遅れてようやくやってきた、しかし短命な「ボヘミアン時代」のベルリンに、ツヴァイクは立ち会っていたのである。演劇批評家としても知られるユリウス・バープ（Julius Bab）は数年後、『ベルリンのボヘミアン』[13]と題する書物を著わした。ベルリンのボヘミアンの最後の時代だったと言えよう。やがてボヘミアンたちは「西地区カフェ（カフェ・デス・ヴェステンス）」に結集した。カフェは「誇大妄想カフェ」と呼ばれ評判にな

った。ボヘミアンも「展示」され、それを目当てにカフェに来る人もいた。商品＝展示価値の増大とともにボヘミアンは消滅する運命にあった。

ツヴァイクのウィーンでの交友関係は、ほとんど市民階級に限られ、その大半はユダヤ人のブルジョアの出であり、お互い安全な生活を事実上保障された同質的関係にあったが、そういう「安全確実」であることへのコンプレックスもあって、ベルリンでのツヴァイクの交友関係はウィーンではおよそ接触することのなかった環境において展開された。サークル以外では小さな安酒場やカフェに出かけ、大酒のみやモルヒネ中毒者といった社会の周辺のひととも付き合いをもった。意外なことに東方ユダヤ人とはじめて接触を持ったのはウィーンではなくベルリンにおいてであった、という。ドイツ語圏ではまだほとんど知られていなかったドストエフスキーの作品の一部を翻訳してくれたロシア人、ムンクの絵を見せてくれたスェーデン人、そして降神術サークルとの出会いもあった。いかがわしくも猥雑であったベルリンには異質なものと衝突するだけの活力があった。それこそが世界都市の精神というものであろう。

「ベルリンで私は、朝から晩までいつも新しい、いつも別な人間と一緒におり、彼らによって感激させられ、幻滅を味あわされ、欺かれさえした。私は思うのだが、ベルリンにおけるほんの一学期、完全な自由の最初の学期ほどたっぷりと精神的な交流を堪能したことはなかった[14]」。

ウィーンと対比してベルリンでの体験をツヴァイクはこのように総括しているわけだが、比較の対象が変われ

ば見えてくる面もちがってくる。ツヴァイクは次にブリュッセルを経てパリに到着するが、そこは伝統豊かな都市とはいえウィーンとは違った街があった。彼はパリを知るにはベルリンを知っていなければならなかったと言うが、パリを知ることによってウィーンとは別の目でベルリンを見ることが可能になったのである。トロツキーも述べているように[15]、当時のベルリンでは対立はむき出しの裸形であらわれ、階級意識は先鋭化していた。一般社会というか広く共有された社交世界はベルリンには存在しないも同然だった、とツヴァイクは言っている。将校の奥方たちは同類たちとのつき合いに満足しており、教師の夫人とはつきあおうとはしなかったし、教師の夫人はまた商人のおかみさんとつきあおうとはせず、商人のおかみさんは労働者の細君とは決してつきあおうとはしなかった。部分社会がそれだけで自足し、他の部分社会とは交わらず、分断されたままであった。同時期のベルリンの社交界を描いたハインリヒ・マンの小説『怠け者の天国（伯林ソナタ）』[16]はツヴァイクの観察を裏づけてるように思われる。パリを知ることによってツヴァイクは、自らノレンドルフ広場のカフェで体験したような異質なもののぶつかり合いは、社会の限られた部分でしか成り立っていないことを思い知らされた。

（3）パリの魅力―街路　浮かれ歩き　リルケ

17、8世紀にフランスでは、宮廷貴族が市民階級全般をのみこむようなかたちで一般的な社交世界が形成されたのに対し、ドイツではそれが形成されず、貴族と市民層が分断されたままであったこと、そして市民層内部では経済市民層と教養市民層とが分断されていたという歴史的事情については、ノルベルト・エリアスが述べているし[17]、またフリッツ・リンジャーは19世紀後半以降のドイツとフランスの大学生の社会的基盤を比較して、そうした歴史的事情が20世紀初頭までは少なくとも続いていたことを明らかにしている[18]。

パリの場合はまったく事情がちがっていた。革命の遺産ということであろうか、ベルリンに見られたような社会の部分社会への分断はさほど見られなかった。ツヴァイクによれば、労働者もその雇い主もお互いを「自由で重要な市民」であると感じていたし、カフェではボーイも将軍と同僚であるかのように握手しているし、プチ・ブルジョアの細君は売春婦を軽蔑することもなかった。階級の障壁がなかったと言えば言いすぎであろうが、その壁を横断し広がる共通の世界があったということかもしれない。

「パリにはたださまざまな対立するものの並立だけがあり、上もなければ下もなかった。豪華な通りとそれに並んだ汚い通り抜けとの間にはいかなる眼に見える境もなく、いたるところが同じように生き生きとして、朗らかであった[19]」。

共有された文化の拡がりと定着の度合い。現代にも通用する都会性とはこのようなことを言うのであろう。パリにおいては、とツヴァイクは続けている。

「単にぶらつくことがすでに楽しみであり、同時にまた常住不断の勉強でもあった。あらゆるものが何人にも開放されていたからである。……　一度浮かれ歩きを覚えると、家にじっとこもっていることは容易ではなかった。街路は磁石のように人を惹きつけ、万華鏡のように絶えず新しいものを示した。……　ただ一つのことが難しかった。家にとどまったり、家に帰ったりすることである[20]」。

名言であると言えよう。パリに対するオマージュとしてこれに勝るものは容易にみつけられるものではない。ぶらぶらパリの街並みを散歩するのは「楽しい」、とツヴァイクは賛美する。彼によれば、パリの最大の魅力は街路とそこに住む人たちであった。「浮かれ歩き」の原語は「ぶらぶら歩き」を意味するBummeln（ブンメルン）であり、今日なら「遊歩」と訳されるところであろうが、「ブンメルン」を「浮かれ歩き」と訳した原田義人の翻訳には味わい深いものがあり、そのままここに引用した。階級横断的に共有されたものがあり、その上に街を「浮かれ歩き」することの楽しさが築かれている。それはただ単に建物の華美さや娯楽装置が完備されているということとは別のものであった。

しかしツヴァイクはぶらぶら歩きに満足していたわけではない。都市の「最も隠れたもの」はぶらぶら歩きによって認識されるというより、「最良のひと」によって、そして彼らとの交流によって認識される、と考える。いかにも後に「偉人たち」の伝記作者として名をあげるツヴァイクならではの発言であり、ぶらぶら歩きに対するベンヤミンとのスタンスの違いもこの辺にあるように思われる。「最良のひと」との良好な関係は例えばバザルジェットやヴェルハーレンとの間に生じた。逸せないのはツヴァイクが「私の世紀の最大の詩人」と呼ぶリルケとの出会いである。元来内気で控えめだったリルケではあったが、パリという都会には心を開放した。ツヴァイクによれば、リルケは「あらゆる些細なものを注意深く眺め、看板に書かれた名前さえも」、それが「リズミックな響きをもっているように思われる」と、喜んで声に出した。ツヴァイクにとって理想的な遊歩者がリルケだった。

最後にツヴァイクの回想録を都市文化論の観点から総括しておこう。ツヴァイクは都市文化の性格にその社会的な拡がりという点から注目している。彼にとってウィーンの都市文化は彼も属する上流市民層と貴族によって

構成されたものであり、ベルリンなどと比べると「品がよく」、また「優雅」であった。だがウィーンの市民階級は層が薄く、都市文化の担い手は社会の限定的部分であり、実際ツヴァイクの交友範囲も狭く限られていた。一方ベルリンの場合は元来軍人都市、官僚都市であり、ベルリンに市民階級が育ってきたのはようやく19世紀前半のことであった。ベルリン都市文化の萌芽はこの頃に求められる。ウィーンとの対比で言えばベルリンの都市文化は市民的で官僚的である。ツヴァイクはベルリンを清潔で秩序正しい都市と呼んでいる。パリはこの点で比較すれば、パリは基本的にウィーン同様、上流市民層と宮廷貴族を主たる担い手とする都市文化をもっていたが、ウィーンと比べるとその文化が小市民層にまで浸透し、より拡がりをもった文化になっている、とツヴァイクは観察している。一方ベルリンには、パリとの比較ではもちろんのこと、ウィーンとの比較においても、拡がりのある共有された文化が欠けており、その分だけ社会的対立はむき出しの形をとる傾向にあった。ベルリンにおいて異質なものの存在は並存するだけにとどまらず対立へと尖鋭化しがちで、それは一方で社会を分断化し、相互の無関心を生みだしもするが、他方において社会的、文化的活力を生みだすもとにもなった。しかし文明化の拡張力が大きく、社会階級や職業の相違を超えて共有される文化が生まれていたパリの方に、ツヴァイクはより魅了されている。

2、ギルバートとワイマール共和国

小冊子ながらワイマール共和国期の思想文化の研究に一石を投じたピーター・ゲイの『ワイマール文化』[21]には「フェリックス・ギルバートに」という献辞が添えられている。そのギルバート（1905―1991）の回想録『古いヨーロッパにおける修業時代―回想1905―1945』（ドイツ語版）[22]を題材にここでは、後に歴史家

として名をなす若きギルバートにとって〈1920年代のベルリン〉とはどのようなものであり、どのような「経験の場」（ペーター・ヴァイス）であったのかを検討したい。

1920年代のベルリンにおいては、すでに世紀転換期以降に出揃っていた「近代化」と総称できるような新しい時代への流れが一挙に加速された。先端的芸術運動だった表現主義は異端ではなくなり、時代の精神的状況をシンボル化する言葉にさえなった。芸術分野に限ってみれば、伝統的芸術と並んで新しい芸術が台頭し受け入れられていった。依然としてベルリンはクラシック音楽やオペラの牙城であったし、クラシック・バレエも盛んであった。古典演劇もドイツ劇場を中心に活況を呈していた。しかしそれらと並行してオペレッタや軽音楽が民衆の心をつかむようになっていたし、舞踊の分野ではダルクローズに始まるモダン・ダンスがラバンやウィグマンらによって普及し、映画やデザイン、広告も新しい芸術分野として認められつつあった。民衆芸術・民衆娯楽だったヴァリエテ（ヴァラエティ）やティンゲル・タンゲルはカバレットとして新しく衣替えをした。

芸術分野の隆盛に比べると、大学は時代の波の影響とは比較的無縁で旧態依然としていたが、それでも学生数の増大や女子学生の進出などに影響されて、ようやく変わろうとしていたのが1920年代のことである。ワイマール時代に学問的徒弟修業を終えたフェリックス・ギルバートは、学問的生涯を始めようとしたその時にナチス体制が成立し、ユダヤ系だったため亡命せざるをえなかった。ここではルネサンス期の文化史の専門家としてアメリカで地位をえることになったギルバートの「回想録」のワイマール時代に関する記述に注目しよう。

ツヴァイクもギルバートも共にユダヤ系であり、19世紀に同化して経済的に成功し、上流社会の仲間入りをした家系に属する。ツヴァイクのベルリン論は、同じドイツ語圏とはいえウィーンからやってきたよそ者の感想だったのに対し、ギルバートのベルリン論は生粋のベルリンっ子による内側からのベルリン論だった。親の経済的

成功を基礎に、思想文化世界に仕事を求め、恵まれた青少年時代をおくった点でも共通しているが、ツヴァイクが文学に向かったのに対し、ギルバートは学問の道に進んだ。

（1）ギルバートの家系

①［ベルリン啓蒙思想］ 遡れば18世紀は啓蒙主義の時代であり、特にヴォルテール、モンテスキュー、ディドロらを輩出したフランスの啓蒙思想と、アダム・スミスやデヴィット・ヒュームらに代表されるスコットランドの啓蒙思想が知られている。一方当時英仏に対し後進国であったドイツ18世紀の啓蒙思想は同じく啓蒙の時代ではあっても、英仏に比べて弱体だった。その代表的人物はレッシングであり、さらに名前を挙げるとすれば、フリードリヒ・ニコライでありモーゼス・メンデルスゾーンだった。レッシングはともかく他の二人はさほど知られているとはいえない。三人のうちニコライとメンデルスゾーンはベルリンを主たる活動の拠点としており、ベルリン啓蒙主義の代表者であった。モーゼス・メンデルスゾーンは１７２９年生まれのユダヤ人で、著述家もしくは哲学者だった。作曲家フェリックス・メンデルスゾーンは彼の孫にあたる。後にメンデルスゾーン家はベルリンの名門の一族へと上昇した。

②［メンデルスゾーン一族］ ギルバートのことを忘れたわけではない。フェリックス・ギルバートの母親はメンデルスゾーン一族に属し、ギルバートはメンデルスゾーン家の末裔にあたる。メンデルスゾーン家はユダヤ系だったが、19世紀の初めにキリスト教に同化し、ベルリン上流社会に上昇していく。すでに18世紀末にモーゼスの息子が銀行を設立しており、以後一族には銀行家が絶えなかった。またフェリックス・ギルバートの祖父はア

グファ社（やがてベルリンの大化学工業会社になる）の創立者の一人であり、初代社長でもあった。一族はこの会社の経営陣にも入ったし、その他にも官僚、弁護士、学者といった職業に就き、一族の子女は著名な医者などと結婚したりしていた。要するにメンデルスゾーン一族はベルリンの恵まれたブルジョアジー、教養市民層、すなわち、ベルリンの上流階級の有力な一員になっていたのである。

（2）ギルバートの生活圏と人間関係

したがって1905年生まれのフェリックス・ギルバートの交友関係も多くが中上流社会のメンバーであったし、一族の人脈から彼が受けた恩恵は計り知れない。学校時代、ギルバートはベルリン西地区の中心ヴィルヘルム皇帝記念教会から徒歩で10分程度の中上流市民層の住宅地に住んでいた。ベルリンの一等地にあたる。住んでいた都会に愛着を覚えるのはよくあることだが、実際によく知っているのは都市のごく限られた範囲にすぎないものである。その意味でギルバートにとって「わがベルリン」にあたるのは、ベルリンのメインストリート、ウンター・デン・リンデン通りの東の端にあるホーエンツォレルン王朝の宮殿あたりから始まり、ルストガルテンやベルリン大学、ブランデンブルク門から緑豊かなティアガルテンを経て、西地区の動物園にいたるベルリンであった。それはさらに西に延びてクーアフュルステンダム通り周辺の高級住宅街を過ぎてグルーネヴァルト、ダーレム、ヴェストエンドの別荘地域にいたる新興地域のベルリンをも含んでいる。周辺部のベルリンや、労働者、貧困階級の居住地域（「ミーツカゼルネ地区」）は、ギルバートの生活圏からは見事なまでに抜け落ちている。このうち、ギルバートが勉強や職業生活において、彼の言う「真面目な生活」においてかかわった地域が、ベルリン大学や国立図書館、官庁や銀行のあるウンター・デン・リンデン通り周辺、つまりベルリンの旧市街だったの

に対し、彼の私生活の中心は新興の西地区、ヴィルヘルム皇帝記念教会を中心として、ノレンドルフ広場やヴィッテンベルク広場あたりから始まり、タウエンツィーエン通りを経てクーアフュルステンダム周辺の地域だった。ギルバートの行動範囲はベルリンのなかのごく一部、しかし政治的にも経済的にも、文化や娯楽面でもベルリンの中心にあたる部分に集中していた。「わがベルリンは都市のブルジョア的部分であり、それが私の行動範囲にあった社会層だった」[23]、とギルバートは総括している。

名門メンデルスゾーン家の一族だったがゆえにえられた恵まれた人間関係にも触れておこう。名士たちとの出会いの多くはギルバートの祖母の兄弟でアグファ社の社長フランツ・オッペンハイム邸において実現した。オッペンハイム夫人は教養があったこともあり、オッペンハイム邸でサロンを催し、自然科学者や美術史家、画家などとギルバートの出会いがあった。叔父の家の魅力のうち、特筆すべきはその絵画コレクションだった。後に散逸してしまったが、ギルバートが思い出せる絵画だけでも、ゴッホの「白薔薇」、セザンヌの「郵便配達人」、ドガの「机上に花瓶を置く婦人」、マネの「パラソルをもつ白い服の夫人」、さらにはエル・グレコの「マドンナ」まであった、とのことである。当時、ベルリンやミュンヘンには、その全盛期は終わっていたとはいえ、まだ「サロン」は生き残っており、学者や芸術家、実業家、官僚のたまり場として一定の役割を果たしており、ナチの時代にも「サロン」の会合はおこなわれていた[24]。

（3）前期「戦後世代」の自己意識と研究修業

①［前期戦後世代の位置］　だがギルバートにとってサロン以上に重要だったのは友人たちとのつき合いだった。彼は1905年、20世紀のゼロ年代生まれの、つまり第一次大戦後に成長した前期「戦後世代」としての自己意

識をもっていた。１８９０年代に生まれ戦争に駆り出された年長の前線世代とも、あるいは１９１０年代に生まれた年若い後期「戦後世代」とも区別される世代の意識だった。戦争に加わった１８９０年代生まれを中心とする前線世代の戦争賛美や戦争体験は聞き飽きており、ギルバートの世代にとって「うんざりするもの」にすぎなかった。彼らは戦争自体を疑わしい出来事と受け止める、平和主義的傾向をもった世代を自認していた。まがいもののヴィルヘルム帝国は嫌悪を覚えるものでしかなかったし、人間形成期に戦争に遭遇した前線世代とはちがって、敗戦、革命、内乱、ハイパーインフレといった安定性を欠く時期に人間形成をおこなったため、状況の安定性というものをほとんど信用できない世代でもあった、とギルバートは述べている。他方彼の世代にとって、20世紀の10年代に生まれ、20年代の相対的安定期に人間形成をおこなった年少世代は社会生活の安定性をあまりにナイーブに信じているように思われ、この世代にも違和感を覚えていた。

ギルバートの私的な行動範囲は新興の西地区であり、彼のような戦後世代の人間にとって、ウンター・デン・リンデン通りに代表される旧市街とは違い、西地区の繁華街は「世界都市の雰囲気」をもつ、モダンな地域と感じられていた。旧市街の凋落、西地区の台頭がしきりに語られた時代である。[25] 世代が違えば見方も当然異なり、例えばドイツ統一のなった１８７０年頃に若い世代であったギルバートの祖母などは、この新興地区一帯の店を趣味がよくない、品がよくないと言って、買物にはわざわざ遠距離の旧市街まで出かけていた。

②［ギルバートの研究修業］　１９２０年代にギルバートは大学を出、研究生活を始め、歴史家ドロイゼンに関する博士論文を書いた。ハイデルベルクやミュンヘンでも学んだが、最終的にはベルリンのフリードリヒ・マイネッケのもとで研究修業をおこなった。ハイデルベルクではヤスパースやグンドルフ、そしてアルフレート・ウ

エーバーらの講義などを聴講した。ミュンヘンでもマックス・ウェーバーの友人だったカール・ローテンビュヒャーのもとでウェーバーの『経済と社会』を読んだり、若い哲学者のもとでヘーゲルの『精神現象学』を読んだり、充実した生活をおくっていたが、最終的には数少ないリベラル派だったベルリンのマイネッケを指導教授に選んだ。ギルバートの研究仲間にも豪華な名前が揃い、やや年長のエッカート・ケーア、のちにアメリカにわたり、アメリカ西洋史学の開拓者になったハーヨ・ホルボーン、ハンス・ロートフェルス、ゲアハルト・マズーアなどがいた。浩瀚な『ローマ史』で知られノーベル賞も受賞した偉大な祖父と同じ名前のテオドーア・モムゼンもいた。ギルバートは教養市民のエスタブリッシュメントの世界に生きていたのである。

（4）新しいライフスタイルと「黄金の20年代」

①［戦後世代のライフスタイル］　しかし都市論を主題とする本論文では、こうした「真面目」な学生生活よりも、ギルバートがベルリンで過ごした余暇の時間の方に興味をかきたてられる。上流知識階級の青年であるという限定つきではあるものの、ギルバートは新しいライフスタイルを実践していた一人でもあった。新興繁華街のクーアフュルステンダム周辺の店やレストランを「品がよくない」と軽蔑していたギルバートの祖母にとって、新しく出現したスナックバーやファーストフードショップなどは「趣味が悪く」、高々「20年代の成り上がり者的優雅さ」でしかなかった。しかし孫にあたるギルバートの好みはむしろ逆で、クーアフュルステンダム周辺、ヴィルヘルム皇帝記念教会付近の「モダン」な店、映画館、カフェなどに好んで通っていた。ロシアバー、フランスバーを含めて多数のバーが軒を並べており、とくに「ジョッキー」がギルバートのお気に入りのバーであった。ここで知り合った友人もまた上流教養層の青年たちであり、例えば世界的物理学者マックス・プランクの息子エ

ルヴィン・プランクがいた。政治的関心の旺盛なエルヴィンは後にワイマール共和国末期のパーペン内閣、シュライヒャー内閣で秘書官を務め、ヒトラー政権成立とともに辞職した。彼は後にヒトラー暗殺未遂事件に加担し処刑されている。ギルバートは友人知人との雑談のほか、試験勉強の場としても「ジョッキー」を利用していた。そういえば１９１０年代に学生だったベンヤミンも、カフェを勉強の場として利用していた。[26] 当時の学生には保守派が多かったが、モダンなライフスタイルはかなり浸透していたようである。

前期「戦後世代」の一人としてギルバートは戦前世代や前線世代に対する自らの「新しさ」を自覚しており、年長者に「ショック」を与えるのを楽しみにしていた。とはいえ慎ましい抵抗の身振りで、「帽子をかぶらない」とか「タバコを吸わない」といったような意味での新しいライフスタイルだった。「夜の生活」もまた新しさのひとつだった。とはいえ有名なベルリンの風俗的な娯楽の「夜の生活」であるというよりは、文字通り夜になっても寝ない生活であった。

例えば、夕食後に仕事（研究）をし、夜も23時頃になってようやく外出して、バーで数人の友人と落ち合い、通りの角にある店でフランクフルトソーセージを食べたりしながら、友人知人とあらゆるテーマについて語り合い、早朝4時頃になってはじめて帰宅の途につく、といった日常生活である。上流階級だったギルバートは伯父から自動車をプレゼントされたが、当時としてはとりわけ車をもつということが新しいライフスタイルを可能にする手段だったはずである。[27]

②［黄金の20年代のベルリン］　世紀転換期にウィーンからベルリンにやってきたシュテファン・ツヴァイクはベルリンの「自由」、ベルリンの活力に感嘆の声をあげるが、後に住んだパリにはベルリンにまして魅了された。

１９２０年代のギルバートもパリに魅了された。だがパリに感激したからといって「ベルリンへの愛」が薄れたわけではない。彼にとって当時のベルリンはパリ以上に魅力あふれる都会だった。

しかしまた多くのひとが言うように、ベルリンは決して美しい都会ではない。大きな宮殿もなければ有名な記念碑もなく、19世紀前半のシンケルの手になる美しい古典主義的建物を別にすれば、家並みは概して新しく、しばしば「成金趣味的」だった。マックス・ウェーバーが晩年、ベルリンの建築物、とりわけ大聖堂（ドーム）を「平民的成り上がり趣味」と酷評していたのが思い出される。[28]

「黄金の20年代」とも言われる「ワイマール文化」に関して言えば、『回想録』から見る限り、ギルバートの関心は「ハイカルチャー」にあったようで、主としてクラシック音楽とマックス・ラインハルトらの演劇に向けられていた。この時期に台頭した映画やカバレットへの言及はなく、ワイマール文化を語るうえで欠かせないブレヒトにも触れられていない。ギルバートもまた同世代の多くの人と同様、20年代のベルリンに生きる「幸福」について語っているが、最初に取り上げられているのは、特に三つのオペラ座があり、三人の偉大な指揮者を擁するクラシック音楽界の威容についてだった。

当時のクラシック音楽界について指揮者ブルーノ・ワルターは回想録『主題と変奏』において、ベルリンの劇場の実績は「その才気、生気、意志の高さ、多彩さ」において、「凌駕されるような可能性はまずないだろう」と述べている。特筆すべきはベルリンにおける多くの実験的試みである。奇妙なものもあったし、時には馬鹿げたものもあり、その大半は忘れられてしまったが、そこには「類をみない精神的活発さ」があって、それがワイマール時代の特徴にもなっていた。[29]

また歴史家ピーター・ゲイは、旧ベルリンには「厳粛さを感じさせるもの」があったのに対し、新ベルリンには「抗しがたい魅力」があったと述べたうえで、こう言っている。

「ベルリンに出るということが作曲家の、ジャーナリストの、俳優のやみがたい憧憬であった。すぐれたオーケストラの数々、百二十に及ぶ新聞、四十の劇場を抱えたベルリンは、野心に燃える人びと、精力旺盛な人びと、才能ある人にふさわしい場所であった。出発地がどこであれ、彼らはベルリンで名をあげたのだ。……　よそ者が住みついてその才能を伸ばすことができる都会として、ベルリンは群を抜いていた」(30)。

ギルバートの回想録に戻ると、いま引用したような文章に比べて、ベルリンが湖に囲まれていること、街路にはカスタニエンやリンデンの木が植えられていて見事であること、ベルリンの夏の気候の素晴らしさについて語られてはいるものの、ベルリンの「精神的活気」についての叙述は一般的なものにとどまっており、遅ればせながらベルリンが「モデルネ」の中心地になり、「国際的」都市になったというだけのギルバートの回想は物足りないと言わざるをえないが、それが上流教養市民層の研究者の一般的関心を反映しているのかもしれない。

最後にギルバートの『回想録』を都市文化論の観点から総括しておきたい。ギルバートの家系、メンデルスゾーン一族は上流の教養市民層を多数輩出している。ギルバートの目指した教授職は、医者や弁護士、官僚と並んで教養市民層の代表的な職業であった。ツヴァイクにせよギルバートにせよ、ウィーンの都市文化やベルリンの都市文化に疎外感を抱いておらず、ユダヤ系とはいえ同化し、ドイツ教養市民の文化にすでに一体化していたこ

とがわかる。またツヴァイクはベルリンの都市文化が社会的に分断化されていると述べていたが、言い換えると、ベルリンには様々な両義的性格が共存していた、ということでもある。例えばベルリンにおける西欧と東欧の共存と葛藤、ベルリンにおける社会的上層と下層の共存と葛藤、そしてベルリンにおける古い文化と新しい文化の共存と葛藤といった様々な両義的性格である。ギルバートの場合、祖母との時代感覚のずれを語っているが、それは世代的ずれであると同時にベルリンにおける古い文化意識と新しい文化の相違でもあった。それはまた、権威主義的で皇帝の威容を誇示するウンター・デン・リンデン通り周辺の旧市街と資本主義的発展に連動し世紀転換期以降新たに形成されたタウエンツィーエン通りやクーアフュルステンダム周辺の新市街の相違に、地理的に表現されている。またギルバート自身はベルリン啓蒙思想の系譜に位置し、資本主義的近代化路線には適合的で、モダンライフの実践者でもあったが、近代化路線のなかから突出するかたちで登場するモダニズム運動には必ずしも共感してはいない。新しい文学、芸術に敏感だったツヴァイクに比べ、ギルバートが控えめであったのは、大学という世界が学問の伝承の上に立脚し、総じて保守的な態度をとっており、そのなかでは比較的リベラルであったマイネッケに共感を寄せていたとはいえ、ギルバートもまた大学人であったことに影響されていたためではないかと思われる。「ワイマール文化」において大学は主役にはなりえなかった。

3、ヘンリー・パクターの『回想録』に即して

（1）パクターの経歴

フェリックス・ギルバートより若かったが、やはり前期「戦後世代」に属するヘンリー・パクター（1907―1980）の『ワイマール・エチュード』（著者の死後に編集出版された）には自伝的考察が含まれている。[31] 世

代の違いを問題にする場合、基準をどこにおくかによって世代の分け方もちがってくる。ワイマール共和国に関しては第一次大戦時に何歳であったかを基準にして、戦前世代、前線世代、戦後世代に分ける場合が多く、ギルバートも「戦後世代」をさらに二つに分けてはいるものの、同じ基準に従っている。

これとはちがって『ワイマール・エチュード』の序言を書いたウォルター・ラカーは[32]、ドイツのユダヤ系移民に関し、ヒトラー政権の成立期を基準に世代を四つに分けている。それによれば、第一に、世紀転換期以前に生まれた世代、第二にパクターもこれに属する１９００年から１９１２年の間に生まれた世代、第三がラカーもこれに属する第一次大戦の勃発から１９２０年代の半ばに生まれた世代、そして第四に１９２０年代末期以降に生まれた世代の四つである。第一世代には戦前世代だけでなく前線世代も含められており、彼らはツヴァイクの言う「昨日の世界」の安定した秩序のもとで人間形成をおこなったが、亡命先では新しい環境に適応できなかった。第二集団は第一次大戦で戦うには若すぎ、ワイマール共和国期に自己形成を行い、亡命時には職業生活がはじまったばかり、という世代だった。第三世代はワイマール期に政治に参加するには若すぎたが、パクターの第二世代はそれが可能だった。

ヘンリー・パクターの父親はベルリンで町工場を経営しており、そこで働く労働者はプロレタリア階級であったわけだが、子ども時代のヘンリーの遊び友達に労働者の子弟はいなかった。すでにツヴァイクやギルバートに関する箇所でも触れておいたベルリンにおける階級間の壁は、パクターの場合、子ども時代にもっていた『前面の家のフランツと後方の家のハンス』という本に即して語られている。次章でさらに主題的に触れることになるが、ベルリンの都市風景の特徴となっている「ミーツカゼルネ（賃貸兵舎住宅）」と呼ばれる集合住宅の「前面の

家」が比較的豊かな家を意味し、奥の日当たりの悪い「後方の家」が貧しい家を意味している。パクターによれば、「ベルリンの中産階級の人びとは通りに面したアパートの住居に住んでいたのに対し、収入の低い家族はみすぼらしい中庭とくすんだ壁に面した後方の家に住んでいた」のである。「前面の家」に住む人と「後方の家」に住む人とは付き合いはなく、せいぜい会釈する程度にとどまった。パクターが「前面の家」の側の子どもだったのは言うまでもない。

開戦のとき7歳だったパクターはにわか仕立ての愛国者になったが、東部戦線から戻った父親に共和国の側に転向させられ、以後一貫して左翼の側から共和国を支持することになる。一時期共産党員としてフライブルクで活動したこともあったが、彼は主としてベルリンで青年時代を過ごした。１９０７年の生まれだったが政治的には早熟だったパクターは１９２０年、わずか13歳の時に政治的実践を始めた。当初はまだ「左翼的」だった民主党のために活動したが、すでに同じ年、青年運動の方に重点をうつしていった。ワンダーフォーゲル運動を中心とする青年運動は元々ベルリン南西部のシュテークリッツで生まれたもので、パクターは熱心に参加した。彼が共産主義青年同盟に加入したのは、ドイツが経済的にも政治的にも安定を回復した１９２５年、18歳のときであった。

彼は政治活動に熱心ではあったが、党の専従活動家になったわけでなく、ベルリン大学に入学し、フェリックス・ギルバートと同様マイネッケの指導を仰いでいる。またベルリン大学では保守革命運動の左派ともいうべき「社会革命派」のカール・オットー・ペテルとも親交をむすんだ。やがてドイツ共産党を追われ、社会民主党に転じ、経済理論家のヒルファーディングのもとで党の機関誌『ゲゼルシャフト（社会）』誌の編集に携わった。

（2）ベルリン像の修正

『ワイマール・エチュード』においてパクターは、一般に流布しているワーマール共和国のイメージをいろいろな局面において修正し、実態は言われるほど極端ではなくもっと散文的なものであったことを、やや斜に構えた視点から叙述している。ゲイの広めた「ワイマール文化」像、映画「キャバレー」が広めたベルリン風俗のイメージ、政治史的書物により広められた左右激突のワイマール時代というイメージ、それらを個人的な体験もふまえながら修正し、時には訂正している。ここでは同書の叙述のうちベルリンに、なかでもベルリン都市文化にかかわる部分を中心に取り上げることにしたい。パクターの回想録には同時代を生きた者ならではの貴重な記述が多いものの、それらは必ずしもベルリンという都会に関係がないので、割愛せざるをえない。

彼はまず「ヨーロッパの悪徳の都」というベルリン像を修正する。「悪徳」ということもあったかもしれないが、「悪徳」と「新しい道徳」は別であり、区別し難い場合もあった。ツヴァイクのウィーンがそうであったように、ベルリンでもヘンリーの父親世代の中産階級には遊びと結婚とを使い分け、同じ階級の女性を結婚相手に選ぶ一方で、遊びの面では下層階級の女性に依存するという「二重基準」が一般的だったが、ヘンリーも加わった青年運動の影響もあって、少なくとも中産階級の内部では「性的態度に変化」が生まれ、性関係は従来よりも自由になった。抑圧的でない新しい両性の関係が模索され、やがて「同意のみによる結婚」さえあらゆる階層で認められるようになった。それが見るひとによっては「悪徳」のもととされたのかも知れないが、父親世代と比べれば自分の仲間たちはそれぞれ「自己流のやり方で道徳的」だった、とパクターは述べている。それは戦後世代による戦前世代に対する自己主張でもあった。

様々なベルリンの局面について語られているなか、どれが本当のベルリンなのかは決めがたい。「ポン引きや麻

薬密売人」のベルリンなのか、それとも旧王宮前の大きな広場ルストガルテンでの大衆デモのベルリンなのか。「旅行者ガイドと新聞のコラム」のベルリンなのか、それとも「労働者と女店員の」ベルリンなのか。「独創性に乏しい学者とその真面目な雑誌」のベルリンか、それとも「前衛劇場と活発な批評家」のベルリンなのか。いずれにせよ「新しくて、センセーショナルナルな、モダンで、進歩的でもあるもの」がベルリンの一部になっていたのは確かである。[33] こうした出来事に自ら加わったひとも、ひとから聞いたひとも、「自分をつねに偉大な時代の目撃者」だと感じていた、とパクターは言っている。

まだまだベルリンでは「何ごとかが起こっていた」。「三文オペラ」をはじめとするブレヒト劇の初演があり、ティラー・ガールズの大胆なショー、ナチと共産党員の乱闘騒ぎ、新聞社主催の舞踏会もあった。ベルリンには野心家や享楽を求める者がひしめきあっていた。作家や俳優、政治家などを目指す人たちはこぞってベルリンにやってきた。ドロップアウトや単なるたかり屋、そして大半は無名だったがボヘミアン気取りの者もいた。パクターによれば、こうした人たちのちょっとした「悪ふざけ」や手柄話が誇大に流布して、「弛緩した都市」、「悪徳の都」としてのベルリンという風評が定着してしまったが、ワイルド・パーティや放蕩生活にうつつをぬかしていたのはごく一部の人であり、そういう人はベルリンに限らず大都市にはいるものである。

（3）カフェ生活の意義

1920年代のベルリンの若者にとってカフェはなくてはならない都会生活の場であった。パクターによれば「表現主義の王」と呼ばれたフェルディナント・ハルデコプフは「われわれはコーヒーとカフェがありさえすれば、他に何もなくても大丈夫だ」と言っている。ツヴァイクのウィーンもそうだったかも知れないが、ベルリン

でカフェは友だちづきあいの場以上のものであった。商談の場でもあったほか、なかにはカフェを「学校」であると言う者さえいた。著述家であれば、カフェで友人と出会うだけでなく、「最初の読者、協力的な批評家、編集者、スポンサー」にも会えたし、時には「良き指導者」にさえ出会うことができた。ヴォルフガング・ゲッツはカフェを「見ること、知ること、考えることを教えてくれた学校」であると述べた。きわめつけは画廊主として有名なパウル・カッシーラーの場合で、彼は皮肉っぽくある婦人に「あなたの息子さんを大学の代わりに、六か月カフェに通わせなさい」と忠告している、とのことである。しかし何といってもカフェは、特に特定のカフェは同時代の多少とも著名な作家、芸術家やその関係者たちが、年じゅうたむろしていた場所であり、まだこの時代にはカフェがそういう役割の場所として機能していた。ベンヤミンは19世紀前半のパリのパッサージュを物書きが雇い主や顧客を探すことのできる場所であると言っていたが、この時代にパッサージュに代わって、カフェがその役割を果たしていたのである。

このようなカフェに関するパクターの叙述は必ずしも彼独自の認識ではなかったが、カフェの「社会学的ディテイル」に関する彼の記述は、同時代のベルリンを若者として過ごしたパクターならではの独自な観察である。当時、若い画家や詩人、作家、批評家、そして学者の卵を加えてもいいだろうが、彼らのほとんどが裕福な家庭の出身で、両親は教養ある市民に育て上げるために息子たちを大学に行かせていた。将来確実な収入の見込まれる法学や医学に進む者が多かったが、一部の息子たちは作家、芸術家、教授を目指し、教養市民の知識人として地位をえるまでの間、卒業後も親の援助を仰がねばならなかった。パクターは皮肉な筆致で、文学や芸術の「反乱文士」も、時には結婚してからでさえ、裕福な親と一緒に暮らすほかなく、それが嫌なら家具付きのみじめな部屋で暮らすほかなかった、と書いている。

さらに若者にとってカフェが必要だった理由をパクターは、下宿の構造や習慣、つまり生活様式に即して語っている。イシャーウッドの小説をもとに[34]製作された映画『キャバレー』にも描かれているように、ベルリンのアパート（集合住宅）は訪問者が応接間を通らなければならない仕組みになっているのが普通である。そこで下宿のおかみが下宿人の異性関係を見張っているのが常であった。若者は夜に交際するとすればカフェに行くしかなかった。またどの家も午前中は掃除をするのが習慣になっており、男たちは外出しカフェに向かった。こうして、父の家からつかず離れず、「自由」と同時に「保護」も確保しておきたいという、生活に困らない階層の若者の気持ちが、「対抗文化としてのカフェの重要性」を決定したのである。カフェは、家庭から遠く隔たった「家庭」であり「学校」でもあって、「世間の煩わしさから守られた聖域」であり、友人と落ち合う場所であるばかりか、「仕事場」、「勉強部屋」にもなり、「疎外から安全に身を守ってくれる隠れ家」であった。

このように見てくると、市民階級の交流の場であったという意味で市民的な文化装置だったカフェが、例えば「ロマーニッシェス・カフェ[35]」のような、文化人・芸術家・芸能人・業界人・有力者のたまり場となった一部のカフェは別として、この時期に次第に大都市の孤独な若者の避難所という意味で大衆社会に相応しい文化装置に変貌しつつあったことがわかる。

（4）学生生活―大学とその周辺

パクターの大学生活にも触れておこう。主たる勉強の場はベルリン大学だったが、彼は一時期交換学生としてフライブルク大学に在籍し、共産主義青年同盟の一員として政治活動に打ち込んだこともあったが、結局アルトゥーア・ローゼンベルクのもとで勉強するためベルリンに戻った。ローゼンベルクはその思想ゆえに大学制度か

らも共産党の正統派からも追放された人物で、今日ではドイツ近現代史の専門家として知られているが、当時はベルリン大学でギリシャ史とローマ史を講ずる私講師の地位にあり、聴講する少数の学生からわずかばかりの頭割りの報酬をえていたにすぎなかった。パクターが正式の指導を受けたのはいずれもリベラルな歴史家だったマイネッケとヘルマン・オンケンからである。

「ワイマール文化」において大学の役割が控え目だったのはよく知られている。「ワイマール文化」自体が閉鎖的で制度的な知識人に当たる教授の文化、大学文化に対抗し台頭しつつあった、市場に依拠した非制度的な知識人を主たる担い手とする文化だったので、それも当然の結果であった。戦後の革命によって帝政は崩壊し共和国になり、労働者出身の大統領も誕生したが、エスタブリッシュメントを構成する軍部や官僚、大学などの従来の支配層は入れ替えもなかった。大学は多少リベラル化したとはいえ、依然として権威主義、保守主義の牙城であり、社会主義者の教授は数えるほどしかおらず、自由主義者でさえ少数派だった。

当時のベルリン大学は充実していた。マイネッケやオンケンだけでなく、ゲシュタルト派の牙城でもあり、ヴォルフガング・ケーラーやマックス・ヴェルトハイマーらがいた。教育学ではエドゥアルト・シュプランガーもいた。だがパクターにとってこうした教授たちの正規の科目より印象深かったのがカール・コルシュとの出会いだった。今日ではルカーチと並ぶ西欧マルクス主義の理論家として知られるコルシュだが、ワイマール時代後半の一時期、ベルリン大学で労働法とマルクス主義哲学を講じていた。ただし大学の正式な科目ではなく共産党の学生クラブが設置した講義である。パクターはコルシュを「私の思想や経歴、政治的発展に最大の影響を与えた人物」と言っている。

コルシュは話し上手ではなく、講義のまとまりもよくなかったが、「自由連想」によるかのように、一つの話題

から突然別の話題に移りながら講義をすすめた。こうした連想、方向転換がパクターにとっては触発的だった。彼は「大学の先生に教えられた全科目からよりも、本題を離れたコルシュの話し方から」多くのものを学んだ。学生は皆彼の講義に魅了された。

ベルリン大学で知り合った学生として特にカール・オットー・ペテルの名前が挙げられている。[36] ワイマール時代にナショナリズムと社会主義の統一を主張した右翼急進主義運動は、今日「保守革命」運動と総称されているが、保守革命派の左翼に位置する集団は社会革命派と呼ばれることもあり、その代表的人物のひとりがペテルだった。保守革命派は様々な集団に分かれ、それぞれが機関誌をもっていたものの、理論的に結集した集団であるというより、体験や情念、心情を中核とする運動であり、マルクス主義における『資本論』のような、広く共有された理論はなく、保守革命派内部で集団への所属を変更することもたびたびあり、政治的急進主義の政党であるナチ党や共産党に移るものもあれば、逆に両党を脱党し無党派の保守革命派になるものもあるといったように、きわめて流動的な関係があった。

ベルリン大学のサークル掲示板のようなところで二人は知り合った。ペテル自身は党員だったことはないが、彼を「異端のナチ」だというひともいた。保守革命派のナチやヒトラーに対する立場は多様であり、ナチに近い集団もあれば、批判的な集団もあった。ペテルはヒトラーをプチ・ブルジョアのデマゴーグで党綱領にあった反資本主義的な主張をことごとく裏切り、党綱領の社会主義も反ユダヤ主義や反共産主義に変えてしまったと批判していたので、ヒトラー政権が成立すると亡命せざるをえなかった。

（5）モダンライフ

先にフェリックス・ギルバートがベルリンのモダンライフを楽しんでいたことを紹介したが、パクターはモダンライフの普及について語っている。1920年代中期以降の「相対的安定期」のことである。外国に旅行すると、戦勝国よりもドイツの学校の校舎、公衆浴場、配管の方が良好な状態にあることが分かった。パクターは「ドイツはヨーロッパでもっとも近代的な国になり、アメリカを除いて、生産と生活水準であらゆる国を凌駕するにいたった」、と述べている。生活は急速に近代化されつつあった。平均的収入があれば、「家庭用電器製品、ラジオ、エレベーター、セントラル・ヒーティング、温水器」などを装備することができたし、かつての「贅沢」は「便利さ」に変わり、「必需品」にさえなった」。

生活環境の変化はライフスタイルも変え、流行が取り入れられた。男たちは芸術家とか映画界の大立者にみえるように、「広い、角ぶちのメガネ」をかけるようになった。著しい変化がみられたのは女たちの場合だった。

「女たちは口紅をつけ、髪をショートカットにし、なかには公衆の面前でタバコをすう者さえいた。ドレスの裾から、まず足首が、次いでふくらはぎが、そして遂にはひざがみえるようになった。誰もが帽子をかぶらなくなった。地味なウェストラインは苦労して若々しい強健なものにまで仕上げられた。……女性も大学に進出し始め、かつては男に用意されていた企業の地位を占めるようになった。コルセットとともに、多くのタブーがなくなった」[37]。

まさに「ローリング・トゥエンティーズ（活況の二十年代）」であった。

特に流行に敏感だったのは、新興のクーアフュルステンダム周辺の西地区であった。パクターが「ファッショナブルで贅沢なニュー・ウェスト」と呼んだ地域である。フォンターネの主人公エフィ・ブリーストが住んだのはここであり、イギリスからやってきたクリストファー・イシャーウッドが「冒険をもとめてさ迷い歩いた」のもこの辺だった。ヴィルヘルム皇帝記念教会や伝説的カフェのロマーニッシェス・カフェ、近代的なベルリンを代表する「西区百貨店（カウフハウス・デス・ヴェステンス）」、動物園駅のある地域だった。そこはまた「昼間は子守りが動物を見に檻の間を回って歩き、夜になると娼婦たちが、屹立する新しい建物がその富と習慣を披露しているこの界隈に媚を売って歩く」ところでもあり、それがまた観光客や俗物を呼び寄せることになった。

（6）文化産業の興隆

もう一つパクターの「回想録」から読み取れるのはワイマール時代における文化産業の興隆であり、これもモダンライフの開花の一環だった。「表現主義とカフェ文化」や「知識人とワイマール文化」といったパクターのエッセイに登場する多彩で絢爛豪華な芸術家を中心とする著名人たちにとって、ベルリンは魅力ある文化市場だった。ベルリンに行けば、あるいはベルリンにいれば仕事がありコネもつくれたし、退屈もしなかったのである。特に「夜のベルリン」ではクラシック音楽やオペラ、演劇のような伝統的な文化・娯楽産業だけでなく、映画やカバレット（キャバレー）のような新しい大衆文化も多数提供されていた。

パクターのややシニカルな視点を借用して言えば、文化的活性化とは文化市場の活性化を意味し、ズバリ言えば文化が金になるということでもあった。帝政期において知識人が社会からの「疎外感」を味わっていたとすれば、ワイマール共和国においてはそういうこともなくなった。教授のような伝統的知識人であれ、作家、芸術家、

弁護士などの新しいタイプの知識人であれ、

「彼らは尊敬され、高給で雇われた。学者や教師として、彼らは安定と公務員としての地位を享受した。人間の価値をまだその肩書で測っていた社会においては、彼らは博士様、枢密顧問様、編集者様、建築家様、弁護士様、教授様だった。ペンをふるう者は誰でも、少なくとも博士様と呼ばれることを求めた」[38]。

ドイツ、とりわけベルリンは彼らが生活し、活躍し、特権を享受する様々な機会を提供した。多数の新聞、雑誌を擁し、ベルリンは新聞都市、出版都市として名を馳せた。著述家に対しては「あらゆる種類の文体、趣味、いろいろな意見を世に出す厖大な市場」が提供された。

作家、芸術家もすでに体制内の存在になっていた。文化市場を度外視して生きていくのは困難になった。例えば左翼的主張を述べたからといって、何か重要な批判的役割を果たしたことにはならないという状況がすでに生まれていた。「左翼知識人層」として著名だったエーリヒ・ケストナーに対するベンヤミンの批判はこの状況の判断に関係していた[39]。

最後にパクターの「回想録」を都市文化論の観点から総括しておきたい。パクターはツヴァイクやギルバートのような上流市民層の出身ではなく、中産階級の出身であるが、彼の場合も子ども時代には貧困階層の子弟との交友はなく、仲間内に限られていた。ツヴァイクの言う交友範囲が狭いという観察はここでも当てはまるように思われる。しかし共産党と社会民主党に入党していたことがあったので、いわばオルグ活動のなかで「プロレタ

リア階級」との付き合いはあった。

パクターの「回想録」で目立つのは、ワイマール時代のベルリンにおけるモダンライフの全面的開花であろう。都市風景が大きく変わり始めたのもこの頃であった。都市交通の形態も大きく変わり、帝政期にはまだ馬の役割は多く、鉄道馬車、馬車、荷車なども都市風景を構成していたが、ワイマール時代になると急速に都市風景から馬が消えて、自動車、バス、電車の時代になった。男女の服装についてはパクターが述べている通りだった。建造物は一挙にすべてを取り壊すわけにいかないから、突然変貌するということはなかったが、新たな建築物は第二次大戦後に一般化する国際様式の建物だった。ベルリン有数の広場で旧市街に位置するアレクサンダー広場は、建築家マルティン・ヴァーグナーによってこうした方向に大幅に改造された。そこを主たる舞台とするアルフレート・デーブリンの実験小説『ベルリン・アレクサンダー広場』が出版されたのは１９２９年、ハインリヒ・ゲオルゲの主演で映画化されたのは１９３１年のことである。

ギルバートはベルリン旧市街と新市街の対立を世代間の対立として描いていたが、パクターの叙述でも新市街はモダンライフの場所として印象づけられる。伝統にとらわれた旧市街では、モダンライフの要求にかなうような都市計画を一挙に実現するのは難しいので、そのような都市づくりには伝統の乏しい、ある程度未開の地の方が都合よく、ベルリンの場合であればクーアフュルステンダム周辺がそれにあたったが、都市改造はいまやアレクサンダー広場のような旧市街にまで及ぶようになった。

ベルリンだけではなかったが、ワイマール時代の大学制度からすると周辺的組織が実績をあげ注目された。フランクフルト社会研究所やハンブルクのワールブルク研究所がとくに有名である。コルシュの講義も大学の末端に位置づけられた科目だった。またベルリンでは既存の大学とは異なる民間の成人教育用のベルリン政治大学も

活況を呈した。当時大学へはもちろん、高等学校までいくひともまだ少なかった。左翼団体や慈善団体は夜学や、いわゆる人民大学を開いて人びとの知的欲求にこたえようとした。パクター自身教えることに関心があり、ベルリンの労働者居住区でキリスト教社会主義者のフリードリヒ・ジークムント＝シュルツェが主宰するそうした学校で、マルクス主義に関する科目を教えた。この経験もあってパクターはアメリカに亡命して後、有名な新社会研究学院で教鞭をとることになった。大学も伝統的な学部や学問に代わって周辺的なところから新しい学問が勃興しつつあり、従来の教養市民文化によっては満たされない新しい大衆層も生まれていたのである。

4、「ミーツカゼルネ」の世界―E・E・ノートの『回想録』から

これまで紹介してきた回想録の著者はいずれも上流のブルジョアジーの出身か、あるいはパクターのように中産階級の出であり、いずれも経済的に恵まれた社会環境に生きていたと言ってよいが、本章で取り上げる回想録『あるドイツ人の回想』[40]の著者エルンスト・エーリヒ・ノート（1909―1983）は貧困階級の出身者であり、大学は出ているが子ども時代は経済的に恵まれない環境で育ち、かれ自身その世界を「ミーツカゼルネの世界」と呼んでいる。彼の最初の著作は『ミーツカゼルネ』と題された新即物的手法による小説だった。ここで取り上げる「回想録」はヒトラー政権の成立の前後で第一部のドイツ時代と、亡命先を扱う第二部のフランス時代とに分かれているが、ドイツ時代の鍵概念になっているのがやはり「ミーツカゼルネ」だった。元来彼は本名をパウル・クランツというが、1927年に生徒仲間との「殺害契約」に関わり、死亡者も出たこともあってベルリンのみならず広く社会に注目された。「シュテークリッツの生徒の悲劇」と言われる事件である。彼はこれを機にエルンスト・エーリヒ・ノートと名乗るようになった。『ミーツカゼルネ』はこの事件の背景を新即物主義的手

法で描いた小説である。フランクフルトでの学生時代、彼は既にフランクフルト新聞に原稿を書き、左翼的な政治活動にも加わっていた。ナチ政権が成立すると追放されフランスに亡命し、戦後西ドイツにもどった。

（1）「ミーツカゼルネ」の歴史

「ミーツカゼルネ（Mietskaserne）」は訳せば「賃貸兵舎住宅」といった意味であり、主として労働者用の集合住宅をあらわす言葉である。本論文ではそのまま「ミーツカゼルネ」の訳語を用いることにしたい。同種の集合住宅はベルリンに限らず、大都市にはよく見られる建造物だが、ベルリンでは狭い土地にできるだけ多数の人間を住まわせるという意図のもとに広く普及した。ベルリンの「ミーツカゼルネ」の古典的研究と言ってよい建築家ヴェルナー・ヘーゲマンの著書『石造りのベルリン　世界最大のミーツカゼルネ都市の歴史』（1930）のサブタイトルに見られるように[41]、「ミーツカゼルネ」はベルリンの都市風景を広く規定している。

ベルリンの下層民の側から都市文化論を構成する場合、「ミーツカゼルネ」はキーワードになる言葉である。まずベンヤミンなどによりつつ[42]、その歴史的由来を紹介しておきたい。ベンヤミンは1929年から1932年にかけて、まだ始まって数年のラジオ放送で子供向けの講話をおこなっており、そのうちの一つが「ミーツカゼルネ」に関する話だった。子どもたちの日常生活において「ミーツカゼルネ」は馴染の建物だったことが分かる。「ミーツカゼルネ」という言葉によって彼は、住居部分だけでなく中庭（裏庭）も含めて話している。ベルリンの「ミーツカゼルネ」には通常三つ四つの中庭が、時には五つや六つの中庭があることもあった。

「ミーツカゼルネ」は「賃貸兵舎住宅」とも訳されるように「軍隊的響き」をもっている。その発生の由来がベルリンの軍事制度と関係があるからである。ホーエンツォレルン王朝には「兵隊王」と呼ばれた君主もいたよ

うに、ベルリンは以前から軍事都市として発展してきた。フリードリヒ大王が亡くなった1786年にベルリンには既に三万六千人の駐屯軍がいたと言われている。となれば問題となるのは彼らの宿舎であり、大王は軍隊とその家族も住める兵舎を多数建設した。

「ミーツカゼルネ」の成立は、フリードリヒ大王が「兵営化による住宅難解決策」をベルリンの住民に対しても導入したこと、に由来する。「大王は首都を水平方向に拡大するかわりに、……　垂直に、上の空に向かって拡張した」、とベンヤミンは言っている。こうしてフリードリヒ大王の時代以来、家主たちは従来の二、三階建ての一家族用の家屋に代わり、ベルリンの建てこんだ地域に高層の住宅、つまり「ミーツカゼルネ」を建設するようになった。この傾向は19世紀後半に一挙に高まった。

中世都市の構造をまだ維持していた近世から現代的都市への変貌の過程で、ヨーロッパの主要都市は多かれ少なかれ都市改造を行っている。そのうち最も大規模な都市改造として知られているのが、オスマンによるパリの大改造計画だったが、パリと比べてベルリンの場合、ホーブレヒトの都市改造計画に見られるように、都市を改造する政治的意志が弱体だったため、投機的な経済のなすがままになってしまった。[43] 1870年代の投機的な資本主義の時代、いわゆる「グリュンダーツァイト（泡沫会社乱立時代）」のことである。「ミーツカゼルネ」が多数生まれたのはこの時代であり、ベルリンの街路のイメージはこれによって決定された。

（2）「ミーツカゼルネ」―住民と生活

ノートもまた「ミーツカゼルネはグリュンダー時代以来ベルリンの街路像を支配している」と述べている。それはまた狂乱の建築投機の象徴であり、勃興する大衆社会の象徴でもあった。ヘーゲマンもそうだが、「ミーツカ

ゼルネ」はとかく労働者の生活環境の劣悪さを説明する文脈で取り上げられているので、今日の見方からは信じがたいかもしれないが、同時代の基準からみれば「モダン」な建物だった、と言われている。グリュンダー時代の「ミーツカゼルネ」は、できるだけ小さな空間に最大限可能な人びとを住まわせるという時代の要求にかんがみれば、「時宜にかなった」建物だった。廊下の共同便所に代わって、すでにかなりの個々の住居にトイレがあったし、一部の住居には入浴設備もあった。

「ミーツカゼルネ」は六階建てで、階段が三つあった。住民の大半は貧困層で、家族は子沢山だった。この高層アパート（「住宅工場」）一つの入居者は数百人に及んだ。建物の所有者はたびたび代わって、住民は所有者が誰か分からなかった。建物の管理はなおざりにされ、壁にひびがはいっていたり、ドアには隙間があったりし、必要があっても修理は行なわれず、それでいて絶えず賃料は上げられた。門衛は地下部屋に住んでいたが、仕事がきついため絶えず入れ替わっていた、とノートは報告している。(44)

「ミーツカゼルネ」の住民についても触れておこう。「ミーツカゼルネ」においては外面的な生活条件は同じように悪かったにも拘わらず、住民の間で統一的な階級構造はなく、彼ら同士の連帯もなされなかった。住民には貧困層が多かったとはいえ、社会構成は多様だった。もちろん工場労働者が多く住んでいたが、下層の職員や役人もいたし、なかには身分の定かならぬ者もいた。そのため住民の間に共属感情が芽生えるのは抑えられた。隣人たちは親しいというよりむしろ敵対しており、家主の干渉に対し賃借人として共同で行動することもなかった。それもあって彼らが共有していたものといえば、不潔で悲惨な生活であった。彼らの収入は多少の違いはあれ同じようなものだった。経済恐慌になれば失業保険給付も生活保護費も役に立たなかった。

ベルリンの「ミーツカゼルネ」にはドイツ特有の問題もあった。ノートによれば、ドイツでは他国では考えら

れないような「身分自慢」が支配的である。職員層は労働者より自分たちの方が上とみなし、給与水準は低くても役人は労働者や職員層を見下していた。こうした身分意識のもとで「ミーツカゼルネ」の住民が政治的な統一戦線を組むのは考えられない。労働者はもっぱら社会民主党か共産党を支持していたし、職員層は急速に影響力を失いつつあった中間的諸政党を支持し、役人たちはそれより右翼に位置していた。選挙戦のときは「ミーツカゼルネ」の部屋の窓それぞれに支持政党の旗が掲げられた。「ミーツカゼルネ」にハーケンクロイツの旗が多くなったとき、ノートはすでにミーツカゼルネを脱け出していた。(45)

「ミーツカゼルネ」の住民にとって神聖で不可侵だったのが「良い部屋」と呼ばれていた一部屋である。それは庶民の男にとって必要不可欠な威信のシンボルであり、庶民の妻の誇りであり飾りでもあった。大半の「ミーツカゼルネ」の住居は台所と廊下、トイレと二つの部屋から成り立っていた。浴室にあるトイレは貴重だったし、アパートの前面に住んでいる場合には、小さなバルコニーさえあった。住民に多い貧困層には子どもが多かったにもかかわらず、二つの部屋のうち一つはほぼ例外なく「良い部屋」であるとされ、実際には住むためや寝るために賃貸され、収入をえていた。(46) そのため家族は一つのベッドに二、三人寝ることにするか、子どものベッドを暗く寒い廊下に置くかせざるをえなかった。そうでなければ神聖な「良い部屋」を日常的な住まいに利用するしかなかった。「良い部屋」には「良い」家具が置かれ、窓には清潔なカーテンがかけられていた。ここには極めつけのキッチュな置物やひどく埃をかぶった装飾品が集められている場合もあった。家族のアルバムや時には装飾用に机の上に聖書がおかれ、金色に縁どられた装丁の古典的書物があることもあったが、誰も読みはしなかった。そこではすべてがぴかぴかしていた。「良い部屋」は特別のお祝いの時に利用され、ここでクリスマスのプレゼントを渡したりした。「良い部屋」で家族が寝ることはなかった。子どもが部屋やベッドを両親と共有せねばならな

いときには、部屋の防音設備がなかったので、年頃の子どもたちは意図せざる両親の授業によって性教育を受けることになった。家族の秘密はここでは護られることはなかった。「ミーツカゼルネ」には「親密領域」はなく、保護された子ども時代は存在しなかったのである。

当時政治運動の形態にも変化があった。政党やその下部組織のみならず、様々な政治的闘争組織のメンバーはユニフォームを着て、上着に政治的な記章をつけたりするようになった。彼らが街頭行進をしているのを見ると、潜在的な内戦はいつ公然たる内戦に変わってもおかしくなかった。共産党系の「赤色戦線（Rote Front）」や社会民主党系の「ライヒスバーナー（Reichsbanner）」、そして愛国主義的な防衛諸団体、とりわけ「鉄兜団（Stahlhelm）」や「ドイツ青年団」（Jungdeutsche Orden）」らが街頭にくりだしていたが、やがてナチの褐色の大群がすべてをのみこんでしまうことになった。対立や敵対は個人的諍いにも及んだ。いずれにせよこうした重苦しい日常生活から政治的急進主義が生まれ、「ミーツカゼルネ」の住民の関係を心暖かいものにするのは難しかった。彼らの生活環境で共通するものと言えば、騒音であり悪臭であり、絶えず心配事があることや喜びのなさであった。しかも住民たちはおのれの悲惨さの責任を近隣のひとに求めがちで、家主や雇用者や経済的政治的状況に求めたりはしなかった、とノートは観察している。[47]

（3）学校生活と「ミーツカゼルネ」

このような「ミーツカゼルネ」はワイマール時代のノートにとって、「家」でありまた「牢獄」でもあった。そこから逃れることはできなかった。エルンストは「ミーツカゼルネ」の環境のなかで育った。一族には「ミーツカゼルネ」に住んでいるひとが他にも何人かいた。「ミーツカゼルネ」の子どもたちと同様、エルンストも6歳に

なると国民学校に入学した。祖父や母親は「より良い学校」に入れたい気持ちを持っていたが、忍び寄るインフレのもとでどうみても無理な願望であった。細かな経緯は省略するが、エルンストは「特別優秀」だったため上級学校への進学が可能になった。まず地元のマリエンドルフ地区の「実科ギムナージウム（Realgymnasium）」を経て、ヘッペンハイムの有名なオーデンヴァルト学校に進み、最終的にはフランクフルト大学に入学した。ホルクハイマーやアドルノがいて、ティリッヒやマンハイムもいた、当時のドイツで最も活気に満ちた大学だった。ノートは博士論文を書き上げたが、共産主義的活動を理由に、審査を受けることもなく国外に追放された「最初のアーリア人の一人」となった。

本論文の主題はベルリンなので大学進学以前のノートに戻ることにしよう。彼は上級学校に進学すればしたで、恵まれた子弟のなかで「ミーツカゼルネ」の生活の惨めさは一層こたえた。彼の作文や宿題にはしばしばしみや汚れの跡があった。自分の勉強机はなかったので、時には窓の敷居やがたがたする調理台の隅を机代わりに使った。そこは汚れていることが多かった。自分のベッドもなく弟と共有していた。換気が悪く階段の下の騒音が聞こえる廊下で寝ていた。まったく寝られず学校へ行くことも多かった。身体を清潔に保つのも難しかった。水道の流しを使い水道の蛇口の水で簡単に体を洗うだけですませていた。そんな具合だったので新しい友人たちの家に招待されたくはなかった。家を訪ねるには上品な制服だけでなく良い服が必要だったが、それを欲しいなどとは言えたものではなかった。学校の友達には自分の生活環境を知られたくはなかった、とノートは記している。[48]

上級学校へ進学すると、ノートは「ミーツカゼルネの友人たち」をすべて失った。新しい学校の帽子をかぶるようになると、「ミーツカゼルネ」の仲間によってその帽子は階級的誇りのシンボルとみなされ、ノートはかつての遊び仲間から不信と敵対心で見つめられるようになったからである。おまけに進学当初、新しい友達はいなか

ったし、恵まれた級友たちにたえずコンプレックスを感じていた。

成長するとともに、こうした不具合はおのずとなくなった。友人とは居酒屋や街歩き、公園などで落ち合うようになり、そこでは如何なる保護や監督からも逃れられたからである。通りはますますわが家のようになった。家と学校の比重は後退した。政治的なデモ行進に加わったり、街をぶらぶら歩いたり、居酒屋に行ったりし、大人の真似をしようとした。こうした振舞を正当化する理由づけには事欠かなかった。例えばニーチェの「善悪の彼岸」に関する本であったり、やりたい放題の賛美であったり、彼らを理解しない親や教師の軽蔑だったり、さらにはまた彼らの恐ろしいまでの孤独であったりした。愛情や承認に飢えていたということもある。

しかし学校や家庭より自由ではあっても、通りの生活には別の制約がつきまとった。身分的階級的な制約は子どもの学校生活はもちろん、街頭での遊びにさえ影響を与えていた。女の子と遊ぶにしても仲間は豊かな階級の女子高生を選び、彼女たちもギムナージウムの男子高校生を選んだ。貧困層のノートはここでも屈折した気持ちを味わうことになった。驚くべきことに、別荘地区に住む上流階級の子弟は自ら女子高生を探す必要もなく、親から遊び用に下層階級の女の子を与えられていた、という。[49] 19世紀末のウィーンにおけるツヴァイクの青年時代が、1920年代のベルリンでも再現されていたということなのだろうか。だとすればパクターも父親世代を批判できたものではないということになる。

（4）「ミーツカゼルネのロマン主義」

ところで「ミーツカゼルネ」は当時のメディア世界において、しばしば懐かしい「心温まる（gemutlich）」生活環境として描きだされてきた。郷土画家としてベルリンでは知らない者のいないハインリヒ・ツィレ[50]が、「ミー

ツカゼルネ」の世界をたびたび描いていることもあって、彼の絵ともども郷愁の対象とされがちだった。

ノートはそのことを意識しながら、「売春宿ロマン主義」、「浮浪者ロマン主義」とともに「ミーツカゼルネロマン主義」という言葉を用いて、物書きの世界に見られる、「売春宿」や「浮浪者」を悲惨であると言いつつも美化してしまう傾向に異を唱えている。ノートにとってそれは外部のひとの見方であり、特にベルリンの「ミーツカゼルネ」は彼らによって「人間的に宥和的」な特徴をもつものとされた。例えば「手回しオルガン弾き（ライアーカステマン）」である。そのオルガンに合わせて野卑だが陽気な裏庭の女の子たちが踊り狂っているという姿や、小生意気な腕白小僧やおてんば娘などが「ミーツカゼルネ」の光景として描かれる。「手回しオルガン弾き」は定期的に「ミーツカゼルネ」の裏庭にやってくる。彼らが演奏するプログラムはいつも同じだった。小銭を受け取ると「ダンケ、ダンケ」とワンパターンに繰り返すのも一緒である。ベルリンの「モデルネ」の一面が繁華街クーアフュルステンダムの贅沢に輝く光にあらわれているとすれば、もう一つの面は「ミーツカゼルネ」の裏庭で見られた。

乞食や浮浪者も絶えず「ミーツカゼルネ」にやってきたが、ここの住民のなかには密かに別の地域に出かけ、そこで物乞いしているひともいたので、あまり収穫は期待できなかった。ストリート・ミュージシャンもいたが、ノートにとってむしろ印象深かったのは「ミーツカゼルネ」の玄関の間にやってくる音楽家たちであった。ノートの義父はいかさまだと馬鹿にしていたが、通常は4人で定期的にやってきて吹奏楽を演奏した。彼らは見下されていたというより、むしろ歓迎されていた。階段の踊り場でトランペットやトロンボーンを鳴り響かせ、建物のひびが入った壁が揺れたりすることもあった。演奏は「主をほめたたえよ」で始まり、第一次大戦の塹壕でも歌われたという「お前の人生を愉しめ（Freut euch des Lebens）」も演奏された。ビールやタバコが演奏代替わ

りであった。映画化された『ベルリン・アレクサンダー広場』には「ミーツカゼルネ」の中庭で演奏に合わせて娼婦とおぼしき女性が「愛は来たり、愛は去る（Liebe kommt, Liebe geht）」を歌い、主人公のフランツ・ビーバコプフがこれを聴いているシーンがある。

貧民の生活は荒んでいるばかりでなく、心暖かい面ももち、時にはそこで愛も生まれるというのは嘘ではないだろうが、「ミーツカゼルネ」のイメージを実態とは別の回路に移してしまうことも確かである。新即物主義的な冷たさと不愛想さで描かれた彼の『ミーツカゼルネ』[51]は、このような「ロマン化」（ノヴァーリス）の思考回路を拒否しており、作家ノートの面目躍如たるものがある。ノート本人と想定される人物の「成長」に即して語られるが、主役は彼本人であるというより「ミーツカゼルネ」という集合住宅とその「環境」であった。ジークフリート・クラカウアーは『カリガリからヒトラーまで』[52]において新即物主義を「問いを発することがない」と批判しているが、言葉としては問わずとも作品全体が問うているノートの手法に彼の批判は当たらないように思われる。

5、終わりに―「都市文化の経験」に向けての総括

本論文も長くなったので最後にノートに関する章を含め本論全体を総括しておきたい。ベルリンの「都市文化の経験」を主題とする場合、同時代のベルリンを体験したひとの記録が有益である。同時代のエッセイや評論もあれば、自伝や回想録、さらには小説の類もある。その際ベルリンをそこの住民として内側から体験したひとの記録が貴重なのは当然だが、旅行者としてであれ、一時的滞在者としてであれ、ベルリンを外部から体験したひとの記録（本論文ではツヴァイクの「回想」）も同じように貴重なのはいうまでもない。

「都市文化の経験」という精神史的な水脈に焦点を当てたいという問題意識を自覚するきっかけとなったのは藤田省三の言う「生活史にくいこむ思想史」、あるいは「生活史的背景をもつ思想史」[53]という発想であった。本論文で用いた題材は「回想録」なので掘り下げは十分とは言えないが、パクターが当時の青年の「カフェ通い」を彼らの生活様式や下宿の建物の構造から説明している箇所や、ノートが「ミーツカゼルネ」と呼ばれる集合住宅の構造と生活様式に触れている箇所は「生活史的背景をもつ思想史」の方法に通じるものがある。

と同時に「都市文化の経験」という場合には、一方で都市を貫き都市住民に共有された文化意識があり、他方でその下位にサブカルチャーを想定できるわけだが、その形態は都市によってちがってくる。世紀転換期のベルリンについてツヴァイクが観察したベルリンにおける共有された文化意識の欠如という問題は、程度の差こそあれワイマール時代にも、ギルバートやパクター、そしてノートらによっても確認されている。ギルバートは大学世界の、パクターはロマーニッシェス・カフェなどを根城とする文化人の閉鎖性を、ノートは「ミーツカゼルネ」の貧民たちの間でも細かな身分的序列意識が根強くあったことを証言している。

だがベルリンにおける統一的文化意識の欠如と下位文化の乱立、並存という事態はベルリンにおける思想文化の活動を停滞させることにはならず、むしろ逆に活性化させていた、というベルリン文化の内的構造が注目に価する。例えばミュンヘンならいかにもミュンヘンらしい、フランクフルトやハンブルクならばそこに相応しい作曲家が活躍しているのに対し、ベルリンの音楽世界は特定の性格をもたず、何でも受け入れるキャパシティがあった。あるいは無個性的であるがゆえにあらゆる実験や新しいものが受け入れられ[54]、全体としてベルリン史上例のない活況を生みだしていたという認識もあった。

本論文で取り上げた人物のうち、ノートを除く三人はベルリンにおけるモダンライフの開花について語ってい

る。モダンライフそれ自体はベルリンに限らず程度の差こそあれ大都市を主要な舞台としている。モダンライフは生活、娯楽、文化の局面において新しいものを生みだし、それらが併存しているわけだが、ベルリンにおいては単なる並存を許さない相互の対立を生みだしやすい状況があったとも言われている。ベルリンにおいてそれを可能にした原因はなにかを生活史に遡ってあきらかにするのが「ベルリン―都市文化の経験」論の中心的な課題であると言えよう。

註

本論文の性格を考え、邦訳のあるものは訳書のみを挙げている。ただし一部訳語などは邦訳にはよっていない。

（1）ジンメル・ゲオルク（Simmel Georg）、居安正訳「大都市と精神生活」（1903）、『ジンメル著作集第12巻（新装版）』（白水社、1994年）所収。

（2）Endell August, *Die Schönheit der Großstadt*, Stuttgart 1908. 美術史的に言うと当時のドイツは印象主義から表現主義に至る時期だったが、エンデルの本書は印象主義的なベルリン論と言ってよい。農村と対比して都会を醜悪なものとして描く主要な論調に対し、文字通り大都会の「美しさ」を前面に出す、都市文化史上重要な意味をもつ本である。

（3）Scheffler Karl, *Berlin. Schicksal einer Stadt*, Berlin 1910. 本書については拙稿「「植民都市」ベルリンの転変―〈ドイツと東方〉問題の一側面」（註5を参照）で詳しく紹介している。

（4）Ostwald Hans hrsg., *Großstadt-Dokumente* 50 Bde.

（5）ベルリン論、都市論に関する拙稿として以下の文献を挙げておきたい。「「植民都市」ベルリンの転変―〈ドイツと東方〉問題の一側面―」、共著『近代国家の再検討』（慶応大学出版会、1998）所収。「世紀転換期ベルリンの都市風景―「ミーツカゼルネ」とH・ツィレ」、寺尾誠編『都市と文明』（ミネルヴァ書房、1996）所収、（なお本書では校正ミスで筆者名が蔭山弘と誤記されているが、蔭山宏が正しい。ここに訂正し、記録しておきたい）。「ナチズムとベルリン・ケーニヒ〈回想録〉への注釈」、中村勝巳編『歴史のなかの現代―西洋・アジア・日本―』（ミネルヴァ書房、1999）所収。「「ジンメル

と（1920年代）」、『法学研究』（同上、1988年12月）所収。「ドイツ印象主義の社会的側面―大都市経験と芸術―」、『法学研究』（同上、1996年9月）所収。「現代的都市経験の一断面―ベンヤミンと遊歩者」、共著『転換期の政治思想―20世紀からの問い』、（創文社、2002年）所収。

（6）シベルブシュ・ヴォルフガング（Schiverbusch Wolfgang）、福本義憲・高本教之・白木和美訳『敗北の世紀　敗戦トラウマ・回復・再生』（法政大学出版局、2007年）、318頁以下。ドイツで「世界都市」と言われるのはベルリンだけである。

（7）Zuckmayer Carl, *Als wärs ein Stück von mir,* Fischer TB 1988. 本書はツックマイアーの回想録。当然文芸領域が充実しているが、ベルリンに関する興味深い記述もある。

（8）ツヴァイク・シュテファン（Zweig Stefan）、原田義人訳『昨日の世界Ⅰ』（みすず書房、1973年）

（9）Hessel Franzについては著作集の他、研究書も多少出ているが、邦語文献としては、早くからヘッセルに注目した園田尚弘の「ヴァルター・ベンヤミンとフランツ・ヘッセル」、『長崎大学教養部紀要（人文科学篇）第27巻第1号、1986年7月、同「フランツ・ヘッセルの小説とベルリン」、『長崎大学総合環境研究（2）』、2000年などがあり、前者には簡単な経歴の紹介がある。ヘッセルの仕事の概観には、Ausstellungsbuch erarbeitet von Wichner Ernest und Wiesner Herbert, *Franz Hessel.* Nur was uns anschaut, sehen wir., Literaturhaus Berlin 1998´が便利である。

（10）ツヴァイク・シュテファン、前掲書、168頁。

（11）スタール夫人、梶谷温子・中村加津・大竹仁子訳『ドイツ論Ⅰ』（鳥影社、2000年）第17章。

（12）「来たりつつある者たち」という集団については、拙著『崩壊の経験　現代ドイツ政治思想講義』（慶応大学出版会、2013）、64頁以下も参照。

（13）Bab Julius, *Berliner Boheme,* Berlin und Leipzig 1904.

（14）ツヴァイク・シュテファン、前掲書、178頁。

（15）トロツキー、森田成也訳『わが生涯（上）』（岩波文庫、2000年）、413頁以下。なお、同、桑野隆訳『文学と革命上』（岩波文庫、1993年）も参照。

（16）Mann Heinrich, *Im Schlaraffenland. Ein Roman unter feinen Leuten,* Frankfurt 2006 (1900).

（17）エリアス・ノルベルト、赤井慧爾他訳『文明化の過程　上　―ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』（法政大学出版局、197

7年）

（18）リンガー・フリッツ、筒井清忠他訳『知の歴史社会学―フランスとドイツにおける教養　1890―1920』（名古屋大学出版会、1996年）

（19）ツヴァイク・シュテファン、前掲書、195頁。

（20）ツヴァイク・シュテファン、前掲書、196頁。

（21）ゲイ・ピーター、亀嶋庸一訳『ワイマール文化（新装版）』（みすず書房、1999年）

（22）Gilbert Felix, *Lehrjahre im alten Europa. Erinnerungen 1905–1945*, Siedler 1989. なお原書の英語版のタイトルは、*A European Past. Memoirs 1905–1945*, New York 1988である。

（23）Gilbert Felix, *ibid.*, S.67

（24）この時期のサロンについては、Martynkewicz Wolfgang, *Salon. Deutschland Geist und Macht 1900–1945* (2009), Aufbau 2011. なおナチ時代のゾンバルト家のサロンについてはSombart Nikolaus, *Jugend in Berlin 1933–1943. Ein Bericht*, Hanser 1984´に言及がある。

（25）この傾向は既に世紀転換期にあらわれた。Lindau Paul, *Der Zug nach Westen*. Berlin und Stuttgart 1898. そしてワイマール時代には決定的な流れとなった。Morek Curt, *Führer durch das "lasterhafte" Berlin*, Leipzig 1931.

（26）ベンヤミンの学生時代とカフェについては、ベンヤミン、岡本和子訳「ベルリン年代記」、『ベンヤミン・コレクション6　断片の力』（ちくま学芸文庫、2012年）所収、472―480頁、「それは、ベルリンのカフェが私たちにとってひとつの役割を演じていた時代だった」ということで始まるベンヤミンのカフェ生活は、先に述べたギルバートのカフェ生活を思い起こさせる。「仲間たちと一緒にやったぶらぶら歩きが、未明の三時頃にここで（ヴィクトリア・カフェ）終わったのだった」。後に『ドイツ悲劇の根源』を書いたのもカフェだったとのことである。

（27）Gilbert Felix, *ibid.*, S.75

（28）ウェーバー・マックス、山田高生訳「ドイツにおける選挙法と民主主義」（1917年）、同『政治論集Ⅰ』（みすず書房、1982年）。ウェーバーは述べている。ベルリンには「みすぼらしいドーム、ビスマルク記念碑の怪物、その他多くのものがあるが、このベルリンこそ例えばミュンヘンやヴィーンに比べて、多くの小都会に比べても陳腐な似而非記念碑主義の記念

碑である。この記念碑たるや、後世の人びとの趣味がドイツ史のこの世代についてどう判断するだろうかとびくびくしながら考えざるをえないほどの代物である」。

(29) ヴァルター・ブルーノ（Walter Bruno）、内垣啓一・渡辺健訳『主題と変奏　ブルーノ・ワルター回想録』（白水社、２００５年）。

(30) ゲイ・ピーター、前掲書

(31) パクター・ヘンリー（Pachter Henry）、蔭山宏・柴田陽弘訳『ワイマール・エチュード』（みすず書房、１９８８年）。本書は「回想録」と長短あわせた多数の評論から成り立っており、なかには本格的なマイネッケ論のような長編もあるが、ヘッセやブレヒト、ハイデガーなどを論じた文章には個人的回想も含まれている。なお彼のワイマール時代論は本書の他、*The Fall and Rise of Europe: A Political, Social, and Cultural History of the Twentieth Century*, Praeger Publishers 1975. 及び *Modern Germany A social, Cultural, and Political History*, Westview Press 1978 にも含まれている。

(32) ラカー・ウォルター「序言」、パクター・ヘンリー、前掲書、６頁。

(33) パクター・ヘンリー、前掲書、１０２頁。

(34) イシャウッド・クリストファー、中野好夫訳『ベルリンよ、さらば―　救いなき人々―』（角川文庫、１９６０年）。

(35) 例えばシェベラ・ユルゲン（Schebera Jürgen）、和泉雅人・矢野久訳『ベルリンのカフェ：黄金の一九二〇年代』（大修館書店、２００５）。本書の原題は『あのときロマーニッシェス・カフェで（*Damals im Romanischen Café*）』というもので、ベルリン・オペレッタ／軽音楽史に名を残すコロ親子のうち、息子にあたるウィリィ・コロが作曲した曲名からとられている。なおパクター・ヘンリー「表現主義とカフェ文化」、前掲書、１０８―１２５頁も参照。

(36) ペテルについては、パクター・ヘンリー、前掲書、２７１―２７７頁。Paetel・Karl・Otto, *Reise ohne Uhrzeit — eine Auto biographie*, Wolms 1982.　なおこの自伝的文章にはパクターの名前は出てこない。

(37) パクター・ヘンリー、前掲書、80頁

(38) パクター・ヘンリー、前掲書　１２６頁以下。またパクターはこうも言っている。「ワイマール社会が両極化しているという説があるが、「左翼と右翼の詩人たちはお互いにディヒター（詩人）と語りかけ、お互い「先生」と呼び合っていたし、右翼政党と左翼政党の政治家たちは……　お互いを「同僚」と呼び合っていた。ローヴォールト社は共産党の著者の作品やナチ

の著者のものを出版し、エルンスト・フォン・ザーロモンのような暗殺者の作品までを出版した」。パクターはこうした事態を批判するのではなく、それがこの時代だったことを強調している。105頁参照。

(39) ベンヤミン・ヴァルター、岡本和子訳「左翼メランコリー」、『ベンヤミン・コレクション4　批評の瞬間』（ちくま学芸文庫、2007年）、同、岡本和子訳「生産者としての〈作者〉」、『ベンヤミン・コレクション5　思考のスペクトル』所収。ベンヤミンの言う「〈ある文学作品は時代の生産関係に対してどういう立場にあるのか〉と問う前に、〈ある文学作品は時代の生産関係のなかでどういう立場にあるのか〉と問いたいのです」という主張は正論ではある。

(40) Noth Ernst Erich, *Erinnerungen eines Deutschen*, Classen 1971.

(41) Hegemann Werner, *Das steinerne Berlin. Geschichte der größten Mietskasernenstadt der Welt*, Berlin 1930. なおヴァルター・ベンヤミンは「ミーツカゼルネ」に対する闘いにおいて建築家ヘーゲマンを「ジャコバン派」と呼んでいる。ベンヤミン、浅井健二郎訳「現代のジャコバン党員」、『ベンヤミン・コレクション4　批評の瞬間』所収。

(42) ベンヤミン・ヴァルター、小寺昭次郎・野村修訳『子どものための文化史』（晶文社、1988年）。なお本訳書で「ミーツカゼルネ」は「賃貸集合住宅」と訳されている。241頁以下に収録。

(43) ホーブレヒト計画に言及している最近の邦語文献として、北村昌史『ドイツ住宅改革運動、19世紀の都市化と市民社会』（京都大学出版会、2007年）がある。

(44) Noth E.E., *ibid.*, S.25.

(45) Noth E.E., *ibid.*, S.26.

(46) Noth E.E., *ibid.*, S.27. なお貧民のまた貸し、寝る場貸しはすでに19世紀前半にはあった。例えばSass, Friedrich, *Berlin in seiner neuesten Zeit und Entwicklung 1846*, Berlin 1983. 住居については13頁以下。特に17頁以下を参照。

(47) Noth E.E., *ibid.*, S.26 f.

(48) Noth E.E., *ibid.*, S.44 ff.

(49) Noth E.E., *ibid.*, S.90 f.

(50) 拙稿「世紀転換期ベルリンの都市風景」、前掲書を参照。なお「手回しオルガン弾き」は当時のベルリン歌謡の定番の登場人物である。

(51) Noth E.E., *Die Mietskaserne* (1931), Ulstein, 1982.

(52) クラカウアー、ジークフリート、平井正訳『カリガリからヒトラーまで』（せりか書房、１９７１年）。

(53) 藤田省三『藤田省三対話集成３』（みすず書房、２００７年）。

(54) これについては拙稿「「植民都市ベルリンの転変」、前掲書。並びに拙稿「ナチズムとベルリン」、前掲書を参照されたい。